講演「死を意義あるものとする文化―過去・現在・未来」
波平恵美子（お茶の水大学　名誉教授）

大変活発に医療倫理ということを踏まえて取り組んでおられる東葛病院主催のこのような会にお招きいただきまして、私の研究について話す機会をいただき、大変ありがたく思います。

死の問題というのは、私は文化人類学という領域を研究しておりますけれども、文化人類学というのはほとんどお耳にすることのない変わった学問領域なんですが、研究の目的は決して変わりませんで、１８４０年代にイギリスで文化人類学という学問領域が創設され、１５０年以上の歴史があります。学問の名前はずいぶんと変わってきましたけれども、目的そのものは一貫しておりまして、それは何かといいますと、人間の長い歴史、１０万年を超えると思われますけれども、人間らしく生きるようになってからもうすでに１０万年になります。その間に人間は、生物学的には種は一つでございまして、肌の違いで黒人、白人、黄色人種などとまるで種が違うかのような印象を持ちますけれども、人という種は一つです。外見は非常に違っておりますけれども、生物学的には一つであります。

一つの種である人間が人間らしく生きるにはどうあればいいか、ということを長い間にわたって、思考活動をしながら現代の私たちのような暮らしぶり、社会の仕組みをつくりってきたのです。文化人類学はそうしたことを踏まえつつも、生物学的な種は一つでありますけれども、人間らしく生きるといいましても、その中身は多種多様である。その多種多様を調べることで、人間の可能性を追求していこうとするのが文化人類学です。その結果、それを通じて明らかになってくるのは、結論というよりは感慨といったほうがいいかもしれませんが、人間ってなんて素晴らしいんだろうと思わざるを得ないような、多種多様なものの考え方をしてきた、地球上に住む非常に変わった動物であるということが言えます。

その非常に変わった、他の動物とは違ったことをたくさんいたしますが、いずれも本能的なものというよりは、いかに優れた人間らしく生きられるかという、自分達も動物ではあるんだけれども、他の動物とは全く違う存在としてこの地球上に生きているという意味で、どのようなありようが可能であるかを追い求めてきたわけです。

その非常に悪いことが原子爆弾みたいな、自らを、再び今のような暮らしを再現できないような、そういう結果をもたらすものを作り上げてはおりますけれども、一方では、それに対する反対運動もする。美しいこともすれば醜いこともする。それが人間ですけれども、結果として危険なものを作ったわけです

けれど、いずれも、どうすれば人間らしく生きることができるのかを目的として、悪い結果になったわけですけれども。

人間が人間らしく生きるにはどうすればいいかということをどのように追求し、その結果どのように多様な生き方を発達させてきたかを研究する、それが文化人類学という学問領域です。文化というものは大変幅広く使われておりまして、「そういうことも文化と言うの？」とお思いになるかもわかりませんけれども、人間の他の動物とは違う文化によって生きること、人間らしく生きるとはどういうことなのか、それを人間が追求した結果、出てきたもの、それが文化であります。そしてその文化はその追求のプロセスで、理不尽なもの、多様なものを結果的につくっていきます。

多様ではありますけれども、過去から現在まで一貫して見ることができるものがあります。バリエーションはありますけれども、方向性として他の動物と違ったものがあります。一つは家族です。今一つが「死の文化」とでも呼べるものです。動物家族という言葉がございますが、動物家族と人間家族の大きな違いは、かつて見たこともない、会ったこともない先祖とか、生きているけれども一度も会ったことがない曾従兄弟だとか、また従兄弟だとか、おおおじさんだとか、ずいぶん前に亡くなったひいおじいさん、ひいおばあさんの存在を、人間は　　想定することができる。そしてそれを、広い意味での家族と考えることができる。動物の家族も、夫婦愛、親子愛の姿を見ることができ、そういう動物の姿に励まされるということもありますけれども、どんなに夫婦愛、あるいは親子愛を持っている動物であっても、見たこともない従兄弟や、見たこともない叔母さんや叔父さんとか、とっくの昔に死んでしまったひいおじいさん、ひいおばあさんが自分にははっきりいるんだというようなことを想定することは動物にはできません。

どんなに単純な社会生活、あるいはどんなに貧しい生活をしている人間であっても、自分たちの先祖というもの、自分の体の中に流れているそういうものが、非常に大きな役割関係のじょうろのかたちの亡くなったたくさんの人たちがいて、その末端のところに自分がいるんだという、そういう情報というんでしょうか、そのじょうろの入り口のところに、お若い方はじょうろをご存知ないかもしれないのですが。

自分の上には限りなくたくさんの亡くなったご先祖がいるんだということを想定することができる。それはどんな動物にもないことであると。

そのこととつながっているのですが、死を思うことができる。自分の死、確実に死ぬということをよく知っています。いつ死ぬかはわからないし、明日やあさってではない。あるいは何年か先のことだが、考えたくないという人もおり、非常に身近なことだと日々考える方もいらっしゃると思いますが、確実に

自分が死ぬということを決して忘れることができない動物が人間です。

人間がなぜ人間らしくということを考えるようになったのか。それは想定するとか想像するとか予測するとかの能力をもっていることです。想像するということが、何度も学習した結果、こういうことが起こるという想定はできますけれども、人から話を聞いただけで、自分の上に確実に起こるであろう、というような想定、想像ができるのは人間だけです。このことが人間が死というものについて、豊かな死の文化を開花させた最大の原因であろうと思います。自分は確実に死ぬということを知っている。そして、自分の存在に直接つながる人たちがたくさんいて、そういう人たちのほとんどはもう死んでしまった。つまり、会ったことがない、面影を想像することはできないけれども、自分の存在に関係しているたくさんの死んだ人たちが存在していたということを知っていると言うことです。

そして、今日の講演のタイトルであります「いかに死を意義あるものとしていくか」ということですが、どんな文化でも死をマイナスの現象であると考える必要はありません。「ありません」と使うのは、死というものは人間にとって終焉であるとか、敗北であるとか、考えたくもない、見たくもないし、想像するのも嫌だ、という風潮がないわけでもない環境だった場合に、あるいは、はなから死というものを想定していないんじゃないか、人間は死なないというふうに考えているのではないだろうかと思われるような現象も見られます。例えば、集団でいじめて同級生を死なせたとします。だけれども、「その子が死ぬとは思いませんでした」と中学生の子が平然として言うとか、あるいは口にするのも憚られるような悲しい話ですが、同級生の首を切って、血の海の中に倒れているにもかかわらず、「あの子が生き返ったらおわびしたい」というようなことを言う、死というもの、その原因をつくった自分にとっても、どれほど死というものが重大なのかということがわかっていない人たちが増えてきていることを考えると、おそらく数万年単位、あるいは、現代の人類はホモサピエンスという種ですが、種がやや違うネアンデルタール人という人種が、もう絶滅してしまった種ですが、その人たちのことまで考えますと、１０万年、それ以上前から続いたことを特別な行為をする、これを広い意味で死者儀礼と言いますが、死者儀礼をしていなければ絶滅している。そういうことを考えると、今、１０万年たって、人間とは、人間らしく生きるにはどうすればいいだろうか、という思考活動を通じて、死というものを意義あるものとする文化、豊かな死の文化を発達させてきたのだが、今や豊かな死の文化というものを捨てようとしているのではないかという危機感を持たざるを得ないような事件や現象が生じています。

人間が人間らしく生きている、人間らしい存在になっていることを支えてい

るものというのは、いくつかありますけれども、先に述べたようにその一つは家族であります。もう一つは死の文化を発達させたことです。

その死の文化というものを捨てようとしているのではないだろうか。そして、家族というのは何なんだろうと思わせるような現象が出てきたことを考え合わせますと、人間らしく生きようとすることをやめてしまおうとしているのではないかと思わざるを得ません。改めて、東葛病院が長い間取り組んでこられた「死の倫理」という問題の中で、死を意義あるものとするために、在宅医療、ターミナルケア、在宅死というものを実現するにはどのようにすればよいかという、そのような格闘と努力というのは人間らしく生きようとする一つの証である、豊かな死の文化の新たな創造であると私はとらえます。

さて、死を意義あるものとする文化は、それぞれの時代、それぞれの社会によってずいぶんと違います。日本はどうなのかと申しますと、非常に早い速度で近代化が進みました。近代化が欧米先進国よりも遅れて生じましたが、しかしすぐに近代化が始まり１６０年、１７０年近くたっておりますけれども。しかしながら、日本というのは、この近代化が社会や文化全体の中でまだら模様のように起こっております。日本だけではありません、急速な近代化を遂げた場合は近代化はまだら模様のようになっています。日本の死の文化に関して言いますと、特に伝統的な、非常に長い時間をかけて徐々に作り上げてきた伝統的なものをつい最近まで残してきた文化であると言っていいと思います。ある部分は急速な近代化の中で早い時期に捨てた。しかし、死の文化は、日本においてはずいぶん遅くまで伝統的なものを大事にしてきた文化だったんですね。

どうしてこういうことをさしてそのように言うのかということを、今から具体的な話をさせていただこうと思っております。ある研究者の中には、日本人は死をタブー視する、死を語らない、死から眼をそむけている、あるいは死を覆い隠そうとするなどいろいろな表現がありますが、とにかく日本人は死と向き合わないということを度々書いておられる方がいます。私の研究の立場からは異なる見方をします。死との向き合い方は文化が違うと、やり方が違います。日本人は死と向き合わない、死から目を背けていると言っている内容というのは、死を言語表現しないというところを取り上げて語っているようにしか見えません。たしかに日本人の文化は死を言語化しない。儀礼という行為でもって表現しています。

この死者儀礼の日本的な特徴は、常に亡くなった人の身近であった人が、家族であったり血縁者であったり親しい友人であったりという人が死が確認された直後から遺体に頻繁に接触するわけです。お棺の蓋を開けて顔を見るとか、お線香をあげるとか、絶えず誰かが近づいていく。これが日本における死者儀礼の大きな特徴であります。つまり、死者儀礼は常に遺体に関して行われると

いうことです。しかしながら、死んでその人の魂はどうなるとかということをはっきりした言葉で語ることはありません。死というものが行為で示されているために、記憶に残りやすい。一方、その儀礼の行為をする人以外の人たちには、そのことが伝わりにくいということです。

死者儀礼を肯定しているところの死の文化というのは大変細かな一つひとつの行為によって、そしてその行為が亡くなった人と生前付き合いのあった人との対話、あえて言いますと、コミュニケーションとして成立しているということです。

この生き残った人と亡くなった人との間のコミュニケーションという言葉はおかしいと思われると思いますけれども、文化人類学でコミュニケーションという場合には言語コミュニケーションだけを言うわけではありません。人と人がすれ違うときに、どのくらい距離をあけてすれ違うのかという、距離のとり方のコミュニケーションと私どもは考えます。人と人の関係を成立させるあらゆる手段、それがコミュニケーションです。従いまして、今日も私が、東京、大阪、福岡を行ったり来たりしていた時期が長いのですが、大阪に着いた途端に「ここは大阪だ」と頭にインプットしませんと、エスカレーターのどっちに乗るかというのがあるんですね。同じ関西でも京都はこっちなんです。だけど大阪は追い越しをやらなかったら絶対右。東京、福岡は絶対左。そうしますと、向こうから来た人に道をゆずる場合、どんなふうに前を横切ってという、それをマナーと言いますが、そのマナーこそが、人と人がすれ違って、前を横切るという一瞬のこと。つまり、人間関係、人と人の関係というのは１時間連続することもあれば、５０年連続することもあれば、一瞬のこともありますけれども、それ全て文化人類学では人間関係が成立していると考えます。非常に短いか、非常に長い。これを間違いますと、殴ったりはしませんけれども、「失礼な！」とじろっと見られたりするわけです。見られたほうは「何よ！」とか思うぐらい、人間関係が成立している。

こういう小さなことから大きなことまでの領域が人間関係であります。そういうふうにとらえていきますと、どれほど多種多様なコミュニケーションがあって、そしてそのコミュケーションの手段があって、その手段を私たちは習得しているということがよくわかります。日本の場合、言語コミュニケーションというのはコミュニケーションの一部でしかないということです。それが徐々に変わってきていて、私たちは、例えば戦前の映画が上映されることがあります、ＷＯＷＯＷとかスカパーとか。それをたまに見ることがありますが、その場合、ぜひ注目していただきたいのですが、日本人の腰のかがめ方です。戦前の日本社会は身分社会です。身分社会で何もせりふがなくても、出入りの植木職人とか何かのおじさんとか、それは服装だけではなくて、今では見ることの

できない腰のかがめ方をする俳優さんがいます。それは演出をしている監督さんはよくわかっているわけで、あそこであの人にこうさせれば、下男が迎えに出たんだとわかるような仕草をさせる。ですが、今は下男もいなければ女中もいませんし、奥方もいませんので、どんなふうな仕草をすれば、どういう身分のどういう人間なのかというのが、せりふでしか表現できないんですね。古い映画にはそれがあります。特に昭和１５、６年より前の映画をぜひご覧ください。そうしますと、日本人が自分の体を使って自分の立場とか自分の感情とか、これから先３０秒間に何をするか、というようなことを体を使って予告していることがよくわかります。小津の映画でも見てとれないことはありませんけれども、場面は少ないです。

このように、コミュニケーションというのは多種多様であります。今でも多種多様であります。日本人の大部分は、コミュニケーションというと言語コミュニケーションが大事だ、言語を鍛えよう、言葉は力だ、というようなことを使っているところもありますけれども、たしかに言葉は力であり、いったん出された言葉は取り消すことが非常に難しい。難しいからこそ、逆に言葉は力と言っている人もいますが、言葉がどんなに限定された力しかないかということもまた明らかになっています。日本人の死の告知というのは、言語でもって語っていることもあれば、語れないこともあるという、その限界をよく知ったうえでの、行為を通して死を伝えるという、そんな文化を見事に発達させた、そういうものであったと思います。

それが結果どうであったかというと、死者の身体、つまり遺体ですけれども、死んだ人の遺体とコミュケーションをとりえると想定する。コミュニケーションがとれると想定しているからこそ、湯潅のときには誰と誰が湯潅をするが、誰はしない。焼き場についていくのは誰と誰と誰であり、薪を持っていくのは誰であり、わら束を持っていくのは誰であり、お骨を一番最初に拾うのは誰であり、喉仏を頭蓋骨の上に乗せるのは誰であると、焼き場での分担まで決めていた地域が残っている所もありますが、そうしたことがなぜ決まっているのかというと、死者とコミュケーションがとれるということが前提になっているからこそ、そのような細かな、死んだ人との関係の違いによって役割分担が細かく決まっているということです。そのことを通して、死とは何かということを考えるだけではなく、死というものを広めて意義あるものとする、それが人間にとって大変重要であるということを、自分の葬儀を通して伝える。そういった文化であったと思います。

では、現代はどうであるかということですが、古いものと新しいものが入れ替わりの時期であると同時に、古いことを、行為として残ってはいるけれども、それがどういう意義であったのかということは、意義の内容がほとんど伝わら

なくなっている時代です。習慣だから、やめるわけにいかないからやっている、だけども、なぜやっているかはよくわからないという、そういう意味では混乱の時期になっているのであろうと思います。未来のことを考えますと、今の混乱の時期は非常に重要な曲がり角でありまして、今後もなお死を意義あるものとするためにはどうしたらいいか。その前に、死を意義あるものと人間が考えなくなったら、いったい何が起こるのか。歴史というものは人間にとって、死んでいる人にとってはもちろんのこと、その周りの人にとっても、それがどれほど重要であるかということを、それがわかりにくくなっただけでなく、実際にも意義が伝わらない。日常の生活の中で、突然犯罪の形として、人間にとって死を意義あるものとみなさない、人間らしさを失っていく姿を私たちは見なければならないということが生じる。特に今朝の新聞にも載っていますように、ぐずった子どもを自分の手で痛めつけて瀕死の状態にして、まだ死んでいないのに捨ててくる母親。そのような女性が出てきますと、母親とは何だ、親子関係とは何だという形でその人の成育歴などが書きたてられるわけですけれども、一番根本のところを考えてみますと、人間にとっての死というものがわかっていない。死というものがわかっていないから、生きるということをわかっていない、という状態になっていることがよくわかります。

死を意義あるものとするという、その意義とは何であるかと申しますと、過去も現在も、部分的ではありますが、まだ残っている、死者とのコミュケーションができると想定してそのコミュケーションをし続けるということが、生きた人間と死んだ人間との違いを明確にし、生きている私は死んだあなたとどんな関係になってしまうのか、生き残った人間である私は何をどうすればいいか、どんなふうに生きていけばいいか、ということを考えさせる非常に重要な意義を持っているということになろうと思います。

さて、医療ということの中にお話を戻しますと、文化人類学の立場からすると、面白いと思いますのは、それを始められた方々は、それを知っておられるかおられないかは別としまして、知らず知らずのうちに日本の死の文化、つまり、死んだ人とのコミュニケーションは取れるし、取ることを良しとする、そのようなものを取り込んできたと言うことができると思います。その現象といえるものが、病院におけるご遺体の清拭であります。病院でご遺体を清拭するという行為はいつどこでどうして始まったか、よくわからないんですね。

この清拭というのは伝統的な死者儀礼でいうと、湯潅です。湯潅というのは、息が切れたらすぐにやらないといけないというぐらい、人の生と死を分ける一番重要な儀礼です。ここから、生きている人間と死んだ人間とのコミュケーションに切り替わる、一番重要な儀礼としてとらえることができるのです。息が切れたときにすぐに取り組まなければならないですから、病院から自宅に運ぶ

までにはずいぶんと時間がかかる。自宅に運んでからでは湯潅のタイミングを失ってしまうというので、病院で始めたのではないか。そして、それを、最期の看取りをなさった看護師の方たちが始められたのではないかと推測できるわけです。

しかしながら、医療というものが生きた人間に対する働きかけということで言いますならば、死者に対して医療従事者の方が働きかけることは本来の医療と矛盾するのですが。そういうことが成立すること自体が矛盾をはらんでいる。ですけれども、以前、九州、四国、沖縄地区の国立大学病院の看護師さんたちの講習会に続けて何年も行ったことがあります。そのときにアンケート調査をしました。アンケートで看護師さんたちに「清拭をしないで送り出した事例がありますか」と尋ねましたら、重症の感染症の患者さんで、なるべく早く病院から出て行ってもらわなければならないというときには清拭ができなくて、そのときは唇だけをちょっと拭いてあげます、という回答がありましたけれども、それ以外では全て清拭をしていた。人数にして１５００人の看護師さん、それも師長経験者の方たちでしたが、全て清拭をやっていました。

それが１９６８年頃の病院医療民主化運動の中で、ある病院で、これは看護業務ではないということで拒否をしたんですね。それに対して看護師さんの中から「いや、それはできない。もっとも重要なしめくくりの行為であるから」と言って、看護師さんの労働闘争の中でも反対する人たちがいて、結局、当時２７０円の清拭のためのお手当てを出すことになって、それで決着したということを聞いたことがあります。

これはじつは保険の点数に入っているんですね。保険の点数に入っているということは大変大きな意味がありまして、国家として正式に清拭を（笑）認めたことになるわけです。これは本当にすごいことです。つまり、正式は葬儀業者にお任せしましょうということに変化してもよかったんですが、そうではなくて、あくまでも慣習として、思いやりとして、看護師さんたちの言ってみれば患者さんへの最後のサービスとして行われていた清拭を国が正式に認めて、財政的な援助をするということですから。

このようなことを考えましたときに、いろいろなことを感じることができますけれども、医療の場における、例えば、モニターでもう心臓が止まっていることがわかっているにもかかわらず、先生が聴診器を使って頚動脈の拍動を調べて、心臓が止まっていることを確認して、「ご臨終です。まことに残念でした。力が及びませんでした」というようなことを、病室のおられる家族に告げるという作業を行います。これらすべて、かつては在宅で亡くなっていたときに行っていた死の儀礼が病院のほうに移動していると言うこともできると思います。

医療現場でたくさんの業務を抱えながらも、死の文化というものをりっぱに

やりながら、しかも、それが伝統的な行為であったということさえも認識していかないといけないし、全部取り込んできたということがございます。未来も、やはりそうした行為が続けられる可能性が高いと思いますし、今後はますます単身者で、臨終になっても重篤になっても、見取りのしようがないという患者さんが増えてくる可能性があると思うんですね。入院のときには保証人をつけないといけませんけれども、保証人が誰もいませんというようなことが、数十年すると出てくる可能性があります。可能性ではなく、確実にです。なぜかと申しますと、単身者が今後も結婚することがほとんど見込めないという人が着実に増えています。その方たちが一人っ子である場合には、まずそうだと思います。親もきょうだいもいない。一人っ子、一人っ子になりますと、３世代たちますと、従兄弟がいなくなる。従兄弟の世代まで広げても、誰もいなくなります。一人っ子が３代続いたと考えると。しかも、５０過ぎて単身の場合ですと、ずっと単身になるという可能性が高くなりますので。そういう時代が統計上確実に来ていますから、病院で亡くなる方の３割ぐらいは保証人がいないということになります。保証人がいないまま死亡しますと、最期を看取る人は医療関係者しかいない。病院関係者、福祉関係者しかいないというような時代が確実に近づいているわけです。徐々にではありましょうけれども、
今のような時代の中で、どのように死の文化をつくりあげていくかということは、それは人間が各自行ってきましたように、試行錯誤をしながら、自分たちは人間らしく生きているということを確信できるような、そういう形に徐々につくっていかなければならないだろうと思います。

そうしましたときに、何を手がかりにしていくか、何を目標としていくかということは大変大切であります。そして、在宅で亡くなる場合と医療施設で亡くなる場合とでは死の文化が変わってくるわけですが、それをつなぐものは一体何であるかということも考えなければならないだろうと思います。その場合、日本人が過去において、どれほど死者とのコミュケーションを取ることに長けていたか。豊かな文化をつくりあげていた、その死の文化をつくりあげようとした背景には、生きるということの意義は死の意義を通してでしか見えてこないということをわかっていた人々であったろうと考えるわけです。

在宅で亡くなる方たち、これは打ち合わせのときに伺いましたシンポジウムも関係あるかもしれませんが、東葛病院がかかわっておられる在宅ターミナルケアの場合にはあまりそういうことはないというふうに伺いましたけれども、ある地域では、地域において在宅ターミナルケアを、そして在宅死を推進しようとしている中心にいる方たちから伺ったんですが、プランもあって予算もあるけれども、スタッフがどうしてもと。それはいろいろ話して協力していただけないかということで伺ったんですが、看護師さんが一人で在宅死を看取るこ

とは自信がないと。自信がないというのは看護職として自信がないということではなくて、例えば、亡くなったときにいろいろなチューブを体内に入れていますけれども、それを抜き取ることはできるけれども、体の開放部分に綿を詰めるのを一人でやることはできない、二人ならばやれると。ご家族と一緒にやることはできないですか、と聞くと、ご家族は全く遺体に触れない状態になっていて、「看護婦さん、やってください」と言うと。なぜできないかというと、やはり、遺体が怖いということは知っているわけです。では、在宅死が大部分であった時代に、遺体が怖い、悪い存在であったかというと、確かに怖くて気味悪くて、今みたいにドライアイスがありませんから、臭くて汚いんですね。臭くて汚くて、体液がドロドロ出てきているけれども、それをぬぐいながら、手ぬぐいで拭きながら、葬式の日を待つ。あるいは、お棺が破裂しそうになったのを縄でグルグル巻きにしばって、皆で腐臭に見舞われながらお葬式の日を待つ。それをどういうふうに意義あるものと考えていたかというと、死んだ人が自分たちに残しているメッセージとして受け取っていた。それは、生前の続きとしてのコミュニケーションとして受け取っていたということです。そうしたことができなくなっている、「できなくなりました」ということで終わるということはいかがなものであるか、ということがもはやわからなくなるということをよく考えなければいけないだろうと思っています。

しめくくりの話をさせていただきたいと思います。

近未来、１０年後２０年後でさえも、確実に予測することができない時代であります。そうしたとき、私のような文化人類学をやっている者にとって大変興味深いと思いますのは、文化というのは、人間が人間らしく生きるために発達させた技術であるし、その技術の結果としてできてくるものでありますけれども、日本の火葬場というのは世界のどこにもないです。この火葬場はほとんど芸術品と言われるような素晴らしいものであります。変な話ですけれども、現代は、お年寄りも小さな子どもさんも、きれいに身体の骨格が残るように焼くことができる。これは日本だけの素晴らしい技術です。そして、お遺骨を皆で拾い上げますけれども、それもまた日本だけなんですね。骨を拾うという所はいろいろな所でありますけれども、きれいに焼かれた骨を拾い上げるというのは日本だけなんです。

そのときに熱いままで出てきますと、腐臭がしますので、その腐臭を取る装置もあります。腐臭を取る装置でなければ、急速冷却して一挙に冷やしてしまいます。最後には３００度にもなるものを一挙に冷やす。お骨を冷やして出すということもやる。こういう技術をなぜこれほどまでに発達させたのかと言いますと、日本では、北関東もおそらくそうだったと思うんですが、土葬の場合、いったん土葬したお骨を７年目に掘り上げて、地上に並べて、白骨した状態を

見て、成仏したとかしないとかという骨の評定をする。そして、浮かばれたとか浮かばれないとか、自分たちの生き様と亡くなった人との関係を、骨を通して見るというようなことが行われました。私は東北地方で、骨を並べて評定をしているところを拝見させていただいたことがありますが、もちろん土がまだ死臭がするわけですけれども、そういう中で、死者とのコミュニケーションを成立させるわけです。そのことが世界に冠たる、言葉がおかしいですが、火葬場を見た外国人は愕然とします。どうしてこんなにすごいのかと。もちろん、自分にはまだ必要ありませんから、輸入することはありませんけれども。

土葬から火葬に急激に変わりました。しかしどんな火葬にするのかといいますと、きれいな形で遺体の形が残るように焼くすばらしい技術を開発し土葬の時と同じように骨格がきれいに残るように火葬しているのです。表層部分は非常に変わっているけれども、基本のところでは変わらない。文化の変化というのは、非常に大事にしているところは変わらないで残っている。

さきほど、文化はまだら模様に変化すると言いましたけれども、深さにおいても、表面においてもまだら模様になっている。変化の例では今後、単身者が増えてくると、在宅で死ぬようになっても、身寄りも家族もいない、というような人たちも出てくる。日本の社会全体がかつてないような多様化の時代になってくる。個人個人の生きざま、死にざまも多様な形になっていくでしょう。そうしたとき、人間が人間らしく、生きていくためには、どの部分だけは残さなければならないのかということを決めるのは、もちろん政府ではありませんで、私たち国民一人ひとりであろうと思います。その一人ひとりが、死の文化をどんなふうに変えたいのか、あるいは自分が死ぬときにどうやってもらいたいのかということを実現するために一番重要なことは、周りで死んでいく人から決して目を逸らさないことです。もちろん、亡くなる前に見させてもらえるということは身内でないとできないかもわかりませんけれども、聞けるだけのことは聞いておく、知るべきことは全て知っておくという、つまり、死というものに対して、飽くことのない関心を捨てないということが、安心で優しく死ぬことにとって重要ではないかと思います。私も日々このように考えております。